

# Normal Deformation and Normal Cones

本多研 院生ゼミ

大柴 寿浩

2024 年 7 月 8 日

# Normal Deformation

- $X$ : a manifold of  $\dim M = n$
- $M \subset X$ : a closed submanifold of  $\text{codim } M = l$
- $T_M X$ : the normal bundle to  $M$  in  $X$

We defined the **normal deformation** of  $M$  in  $X$ :

- $\tilde{X}_M$
- $p: \tilde{X}_M \rightarrow X$
- $t: \tilde{X}_M \rightarrow \mathbf{R}$

## Normal Deformation

$p$  and  $t$  satisfy the following conditions:

$$(4.1.3) \quad \begin{cases} p^{-1}(X - M) \cong (X - M) \times (\mathbf{R} - \{0\}), \\ t^{-1}(\mathbf{R} - \{0\}) \cong X \times (\mathbf{R} - \{0\}), \\ t^{-1}(0) \cong T_M X. \end{cases}$$

## Normal Deformation

- $\Omega := t^{-1}(]0, +\infty[)$
- $j: \Omega \hookrightarrow \tilde{X}_M$
- $\tilde{p} := p \circ j$

(4.1.5)

$$\begin{array}{ccccc} T_M X & \hookrightarrow & \tilde{X}_M & \xleftarrow{j} & \Omega \\ \downarrow \tau & & \downarrow p & & \swarrow \tilde{p} \\ M & \hookrightarrow & X & & \end{array}$$

$\xrightarrow{s}$        $\xrightarrow{i}$

# Normal Deformation

## Claim

$\tilde{p}$  is smooth.

**Proof.**  $\tilde{p} = p|_{\Omega}$ .



## 正則関数と有理型関数

$f$  を  $\mathbb{C}^n$  の開集合上で定義された複素数値関数とする.

### Definition (正則関数)

$f$  が正則であるとは、各成分  $z^1, \dots, z^n$  について正則、すなわち、複素微分可能であることをいう.

### Definition (有理型関数)

$f$  が有理型であるとは、 $f$  の定義域の各点で高々極しか持たず、極を除き正則であることをいう.

# 楕円関数

## Definition

$\omega_0, \omega_1$  に対し,  $\mathbb{C}$  上の有理型関数  $f$  で

$$f(z + \omega_0) = f(z), \quad f(z + \omega_1) = f(z)$$

を満たすものを,  $\omega_0, \omega_1$  を周期とする, 或は  $\Omega$  を周期とする楕円関数という.

次の補題がある.

## Lemma

商写像  $p: \mathbb{C} \rightarrow E$  の引き戻し  $p^*: f \mapsto f \circ p$  は  $\{E \text{ 上の有理型関数}\}$  から  $\{\Omega \text{ を周期とする } \mathbb{C} \text{ 上の楕円関数}\}$  への 1 対 1 対応を定める.

# Weierstrass の $\wp$ 関数

## Definition (Weierstrass の $\wp$ 関数)

$$\wp(u) := \sum_{\substack{\omega \in \Omega, \\ \omega \neq 0}} \left( \frac{1}{(u - \omega)^2} - \frac{1}{\omega} \right)$$

は  $\Omega$  にのみ 2 位の極を持つ楕円関数である.  $\wp$  を Weierstrass の  $\wp$  関数という.



# 分岐指数

## Fact

$X$  と  $Y$  をリーマン面とする.  $f: X \rightarrow Y$  を定値でない正則写像とする.

$P \in X, Q = f(P) \in Y$  とおく.

このとき,  $P$  のまわりの局所座標  $t$  と  $Q$  のまわりの局所座標  $s$  と正の整数  $n \geq 1$  で,  $f$  の局所座標表示が  $s = t^n$  となるものが存在する. この  $n$  は座標の取り方によらない.

# 写像度

## Fact

$X$  と  $Y$  をコンパクトリーマン面とし,  $f: X \rightarrow Y$  を定値でない正則写像とする. このとき, 次が成り立つ.

1.  $\forall Q \in Y \quad f^{-1}(Q) \neq \emptyset, \#f^{-1}(Q) < \infty.$
2.  $\#\{f \text{ の分岐点} \} < \infty.$
3.  $Q \in Y, d(Q) := \sum_{P \in f^{-1}(Q)} e_P: \text{constant. } \deg f := d(Q).$
4.  $Q \in Y - \{f \text{ の分岐点} \}, \#f^{-1}(Q) = \deg f.$
5.  $Q \in \{f \text{ の分岐点} \}, \#f^{-1}(Q) < \deg f.$

## 分岐指数と写像度

### Definition (分岐指数)

上の事実における  $n$  を  $P$  における  $f$  の分岐指数といい,  $e_P$  とかく.  
 $e_P > 1$  のとき,  $P$  を  $f$  の分岐点という.

### Definition (写像度)

$d = \deg f$  を  $f$  の写像度といい,  $f$  を  $d$  重被覆写像という.

# 主定理

## Theorem (複素トーラスから射影直線への 2 重被覆)

$E$  から  $\mathbf{P}^1$  への正則射

$$\wp: E \rightarrow \mathbf{P}^1; \quad [z] \mapsto [\wp(z); 1]$$

は 4 点

$$[0], \left[\frac{\omega_0}{2}\right], \left[\frac{\omega_1}{2}\right], \left[\frac{\omega_0 + \omega_1}{2}\right]$$

で分岐する 2 重被覆写像である.

## 定理の言い換え

$P \in \mathbf{P}^1$  に対し,

$$\#\wp^{-1}(P) = \begin{cases} 1 & ([0], [\frac{\omega_0}{2}], [\frac{\omega_1}{2}], [\frac{\omega_0+\omega_1}{2}] \mapsto P \text{ のとき}), \\ 2 & (\text{otherwise}) \end{cases}$$

ということ.

## 証明 (1/2)

$\wp$  は  $\Omega$  にのみ 2 位の極をもつ楕円関数であったから,  $[0]$  のみに 2 位の極をもつ  $E$  上の有理型関数というのと同じである. したがって,  $\wp^{-1}(\infty) = \{[0]\}$  であり, 写像度に関する事実より,  $\deg \wp = 2$  である. いま,  $\wp$  は偶関数なので,  $[a] \in E$  に対し,  $\wp([a]) = \wp([-a])$  が成り立つ.  $[a]$  が  $E$  の 2 分点でなければ,  $[a] \neq [-a]$  である.  $\deg \wp = 2$  なので, このとき,  $\wp^{-1}(\wp([a])) = \{[a], [-a]\}$  と確定する.

## 証明 (2/2)

$[\omega_0/2]$  の近傍で  $\wp$  を局所座標表示する.  $\wp$  は  $\omega_0$  を周期にもつ偶関数なので  $\wp(-z) = \wp(z) = \wp(z + \omega_0)$  をみたす. 両辺を微分して,  $-\wp'(-z) = \wp'(z + \omega_0)$  となるが,  $z = -\omega_0/2$  のとき,  $-\wp'(\omega_0/2) = \wp'(\omega_0/2)$  となる. したがって,  $\wp'(\omega_0/2) = 0$  となる. よって,  $\wp(z)$  の  $\omega_0/2$  のまわりでの展開における 1 次の項の係数は 0 である. したがって,  $e_{[\omega_0/2]} > 1$  であり,  $[\omega_0/2]$  は  $\wp$  の分岐点である.

$[\omega_1/2]$  と  $[(\omega_0 + \omega_1)/2]$  についても同様に,  $e_{[\omega_1/2]} > 1$ ,  $e_{[(\omega_0 + \omega_1)/2]} > 1$  となるので,  $\wp$  は  $E$  の 2 分点で分岐する 2 重被覆であることが示せた.

## 参考文献 I

[KS90] Kashiwara, Schapira *Sheaves on Manifolds*, Springer, 1990.